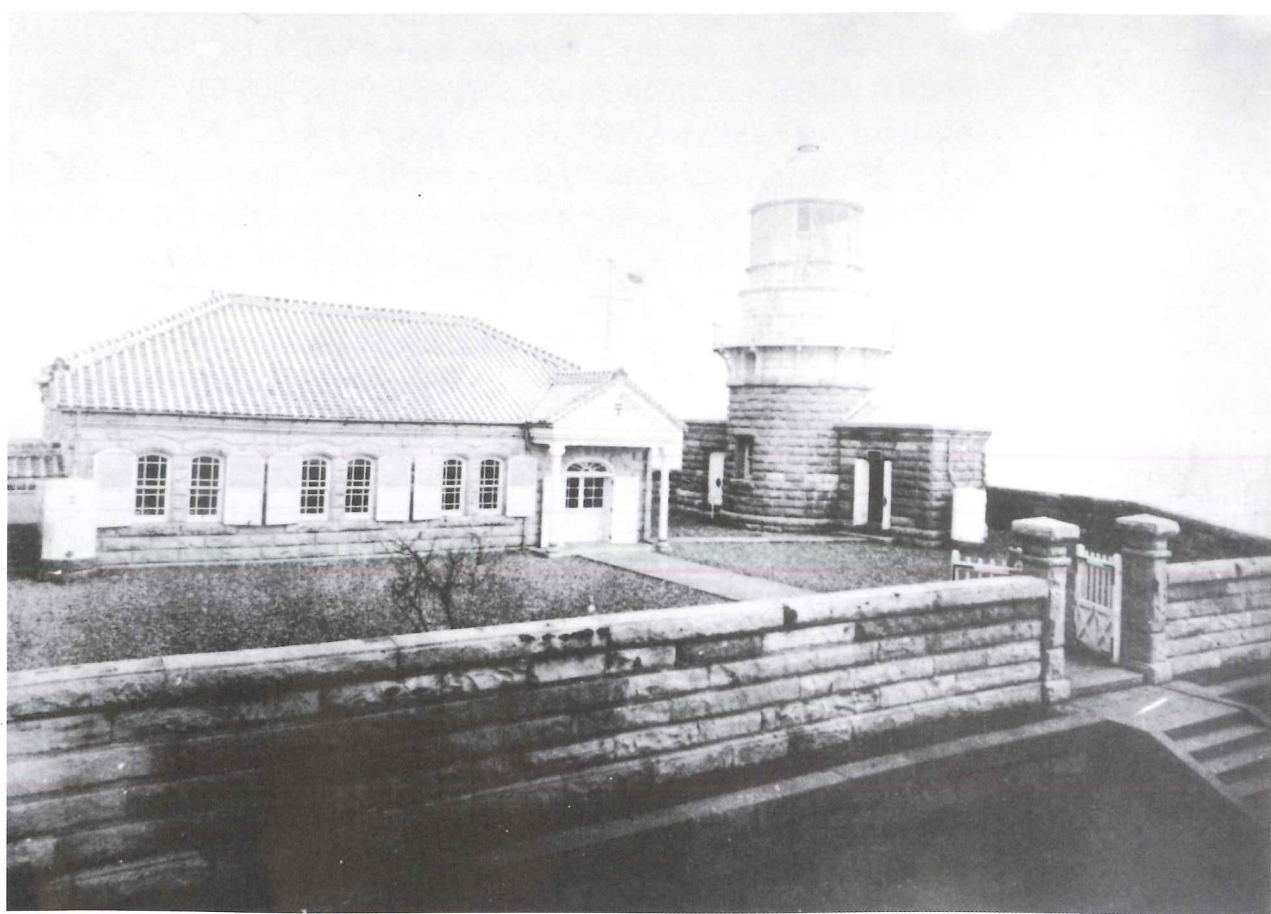


登録有形文化財

# 美保関灯台



昔日の美保関灯台（「島根写真帳」明治40年版 島根県立図書館所蔵より）



## 境海上保安部

鳥取県境港市昭和町9-1  
TEL 0859-42-2532  
0859-42-2534

ホームページアドレス

<http://www.kaiho.mlit.go.jp/08kanku/sakai/>

沿岸域情報提供システムアドレス

パソコン用サイト <http://www6.kaiho.mlit.go.jp/08kanku/sakai/>

携帯電話用サイト <http://www6.kaiho.mlit.go.jp/m/08kanku/sakai/>

スマートフォン用サイト <http://www6.kaiho.mlit.go.jp/sp/index.html>

境海上保安部

# 美保関灯台 「登録有形文化財」となった 100年を越えて

美保関灯台は、「出雲風土記」にある国引き神話に代表される日本神話の舞台である島根半島東端の地蔵埼に位置し、昭和10年に改称されるまでこの地名を冠した地蔵埼灯台と呼ばれていました。

地蔵埼の地名は、「大山寺縁起」に載っている「昔、出雲の国玉作に依道という猟師が居り、美保の浦を過ぎたとき海底から金色の狼が現れ、追いかけると大山の洞に入った。矢を射ようとした所、目前に地蔵菩薩が現れたので、猟師が弓を捨てると、狼は老尼となって信心の道を説いた。猟師は修行を重ね大山寺の開基金蓮上人となった。」という話に由来するといわれています。また、出雲地方の地誌「雲陽誌」には、岬に地蔵があり廻船や隠岐国から出雲国へ渡る船の目印であったとされています。

山陰沿岸は、江戸時代に大坂と北国との西廻り廻船の寄港地として栄え、海上輸送も盛んで各地に和式の灯明台がありましたが、大型灯台は、明治後記の海運助成策や開港による貿易の活発化に伴って整備が始められ、この草分けとして設置されたのが美保関灯台です。

これより先、明治前期に地元の有志者が数度、灯台の建設を計画し実現しなかったことが伝えられており、この地が航海にとって要衝であったことが伺えます。

美保関灯台は、着工から2年余りの歳月をかけ明治31年11月に点灯し、沖を行き交う船の安全な航海に寄与することになります。その後、時代の進展に伴って多くの改良が加えられ、昭和37年に自動制御機器の導入により職員の常駐を廃し、平成5年に最新の設備へ改良され、船の航海がハイテク化した現在でも海の重要な道しるべとなっています。

また、地元片江村(現美保関町片江)の石工、寺本常太郎氏の手によって造られた石造りの建物は、当時のままの姿をとどめており、現存する明治の建造物として、歴史的、文化的、建築技術的に貴重な価値を高く評価されています。加えて、この地は、日本海の雄大な眺めと、晴れた日には遠く隠岐諸島や美保湾を隔てて大山を望むことのできる景勝地でもあり、年間を通して訪れる人も多く、地域のシンボルとしての役割も担っています。

こうした歴史を積み重ね100周年を迎えた平成10年には「世界の歴史的に特に重要な灯台100選」に選ばれ、平成19年には現役の灯台として初めて登録有形文化財に指定されました。

美保関灯台は、今後も明治から続く大切な役割を果たし、地域に根付いた歴史を刻み続けることでしょう。



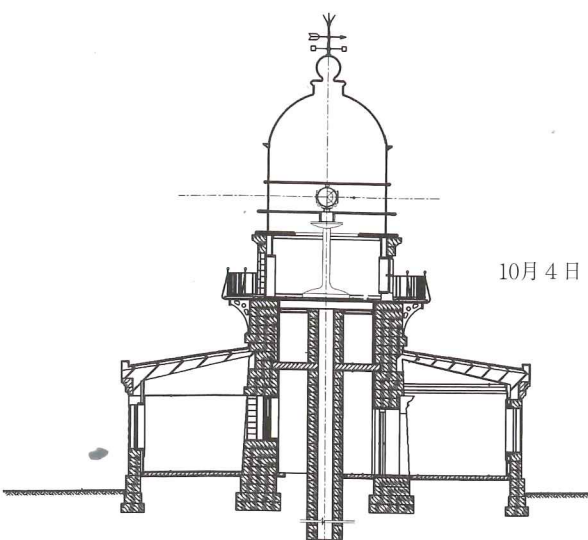
名称	美保関灯台
位置	
所在地	島根県松江市美保関町 美保関1338-17
北緯	35度34分02秒 (02.28)
東経	133度19分32秒 (31.65)
構造	白色塔形(石造)
灯質	単閃白光毎12秒に1閃光
光度	49万カンデラ(実効光度)
光達距離	23.5海里(約43.5km)
明弧	115度から52度まで
高さ	地上から灯台頂部 14.00メートル 平均水面上から灯火 82.91メートル
設計者	黒田喜隆

●灯台の沿革							
年号	所属	管理	西暦	年号	沿革	所管庁	
明治	工部省		1868	明治元年		神奈川県裁判所燈明台掛	
			1870	明治3年		工部省燈明台掛	
			1871	明治4年		工部省燈台寮	
			1877	明治10年		工部省燈台局	
			1885	明治18年		逓信省燈台局	
			1891	明治24年		逓信省航路標識管理所	
			1897	明治30年1月9日		灯台起工(「山陰新聞」より)	
明治	逓信省	地蔵埼	1898	明治31年9月30日	竣工式挙行。建設費5万1654円61銭1厘(「山陰新聞」) レンズ16000円、灯籠18000円、材料17500円		
			明治31年11月8日	地蔵埼灯台として、職員3名で業務開始(初点灯) 第一等閃光レンズ(分銅重力による回転) 光度6.75万燭光(四重芯石油燈)※1燭光=1カンデラ 灯質30秒に1閃光			
大正	省	灯台	1914	大正3年7月18日	光度変更18万燭光(石油蒸発白熱灯)		
			1922	大正11年9月22日	光度変更6.3万燭光(電球100V-1000W球形直径178ミリ全長370ミリ)		
			1925	大正14年			逓信省燈台局
昭和	美保関灯台		1935	昭和10年2月11日	名称変更、現在の「美保関灯台」となる。(宮城県の地蔵島灯台との類似を避けるため。)		
			1941	昭和16年	(太平洋戦争開戦)	逓信省海務院航路部	
			1943	昭和18年		運輸通信省海運総局海運局	
	運輸省	運輸省	境港航路標識事務所	1944	昭和19年		運輸通信省燈台局
				1945	昭和20年	(終戦)	運輸省燈台局
				1948	昭和23年		海上保安庁
				1953	昭和28年8月1日	管理事務所を境港航路標識事務所に変更。職員5名。直接管理から職員交代による滞在管理に変更。	
平成	保安庁	境港航路標識事務所	1954	昭和29年6月12日	光度変更150万カンデラ(LB90型回転燈器、B-3白熱電球100V-1000W管型直径64ミリ全長254ミリ) 灯質変更、群閃白光10秒隔て5秒間に2閃光		
			1955	昭和30年4月1日	管理事務所を境海上保安部に統合。職員が滞在。		
			1962	昭和37年4月1日	滞在管理から職員による巡回管理に変更。制御装置新替及び無線監視装置の導入による無人化。		
			1964	昭和39年4月1日	官舎の建物及び敷地を用途廃止の上、大蔵省に引き渡し。		
			1990	平成2年2月28日	明治期灯台の保存調査		
			1993	平成5年3月9日	光度変更46万カンデラ(LBM60型灯器、メタルハライド電球100V-150W管型直径20ミリ全長130ミリ) 灯質変更、単閃白光12秒に1閃光		
			1998	平成10年6月	「世界の歴史的に特に重要な灯台100選」に選ばれる。		
			1998	平成10年10月	明治期灯台保存工事(耐震性向上)		
			1998	平成10年11月8日	灯台100周年記念式典		
			2002	平成14年4月1日	光度変更49万カンデラ(実効光度表示採用)		
2007	平成19年10月2日	「登録有形文化財(建造物)」の登録を受ける。					
2008	平成20年度	経済産業省の近代化産業遺産に指定される。					

### ●灯台の建設

灯台建設の経緯などについては、当時の山陰新聞に次のような記事が掲載されています。

記事日付	記事内容
明治29年5月28日	大阪航路標識管理所員1名、地蔵鼻に来て建設予定地付近の潮水を採用して帰る。
6月23日	逓信省御用船明治丸が5月に入港、建設予定地を測量。
明治30年1月7日	技手3名が12月下旬に美保関に来着し、起工の準備。 「(略) 尚ほ美保関より地蔵ヶ鼻まで新道を開墾せんと有志者は協議し居るとなり」
1月9日	灯台起工。 「(略) 同港民は盛大なる起工式を挙げんと計画し但有志者より人夫三百余名を寄付する由(略)」
1月28日	「(略) 美保関市街より灯台に至る八町余に新道を設けんと目下工事を取急ぎ居れり」
2月5日	航路標識管理所技手大沢正業、黒田喜隆、書記三木権一2月4日美保関に赴く。
5月15日	逓信省御用船新発田丸、用材を積載して5月11日入港、竹田技師ほか3名工事の監督として来着。この頃毎日百数十名工夫を使役。
8月25日	工事は埴り事務所の外側が完成、点火個所の工事中。
明治30年1月13日	工事は6~70名の工夫を使役し進行中、6分程度竣工し4~5月頃完了予定。
7月15日	工事8分どおり竣工、点火は9月末か10月初旬の予定。 (雇銭昇騰し人夫40銭以上、大工50銭以上、石工60銭以上)
8月4日	灯台竣工、諸機械も順次到着し据え付けに着手。
9月3日	逓信省事務官湯河元臣工事竣工検査のため美保関へ赴く。
10月2日	9月30日に竣工式を挙る。 青木警部長演説「(略) 従来此辺の航路は全く日本郵船会社と大坂商船会社の専有するところにして彼等の取むる利益は実に鮮少にあらざる之当地方民の遺憾とするところにあらずや今や此の灯台の設置を見るに至りし以上は地方人民は十分此の灯台を利用して航海に漁業に大いに其の利益を取めんことを注意せざるべからず。」 灯台看守10月4、5日に到着予定。点灯は本省の告示手続きを済ますため11月上旬の予定。
10月4日	建設総費51,500円、その内フランス製レンズ16,000円、灯籠18,000円、残りの17,500円は材料費、総費のうち地元には19,000円が支払われた。諸機械、木材等は本省より取り寄せ、石材その他の材料は米子、松江、美保関にて購入。 「(略) 敷地は美保関村の共有(反別は五町三反三畝歩にして時価五百円)なりしが灯台の建設の爲めに其の筋へ献納し又天下より灯台に至る新道の地積は共有と定秀為三郎、天下捨松氏との所有なるがこれまた其筋へ献納出願中なり」と



以上のように美保関灯台建設に当たっては、道路建設、人夫提供、敷地献納等地元の全面的な支援が伺えます。また、竣工式の青木警部長の演説では、灯台建設の意義と、地元の期待の大きさが伺えます。

その他、美保関町誌(昭和61年発行)には「片江村の石工寺本常太郎によって施工された」と記されています。



### ●灯器の変遷

美保関灯台のレンズは、現在のものが三代目にあたります。

## 【レンズ】

#### ●初代レンズ「第一等フレネル式閃光レンズ」(明治31年~昭和29年)

初代レンズは、フランスのソーター・ハーレー社製で、円形の屈折レンズの上下に反射レンズ(プリズム)を配置した三層のフレネルレンズ八面からなり、釣り鐘のように光源を囲む構造でした。高さ約2.6メートル、内径が約1.8メートルもありました。



第一等フレネル式閃光レンズ

当時の日本には大型レンズの製作に必要な技術がなく、イギリスとフランスからの輸入品に頼っていました。高価なため、その保守には細心の注意が払われており、灯台にはレンズ細部とキズの原因を記載する「<sup>かきんぼ</sup>瑕瑾簿」が備えられていました。

このレンズを円形軌道上に配置された特殊な形状をした12個の車輪の上に乗せ、240秒間に1回転させることで30秒に1閃光の灯質(光り方)をつくりました。

この装置を<sup>てんろく</sup>転轆装置といい、動力には吊り下げた分銅が落下する重力を利用していました。3~4時間毎に500~600キログラムの分銅を巻き上げる必要があり、多大な労力を擁しました。現在、灯室から地下まで続く灯塔中心部の円筒に当時の分銅のなごりが見られます。

初代レンズは、昭和29年に役目を終え、映画「喜びも悲しみも幾年月」のセットでも使われました。その後、長らく大阪



の遊園地に展示されていましたが、灯台が登録有形文化財となった平成19年に灯台に隣接するビュッフェ(旧灯台官舎)に里帰りしました。

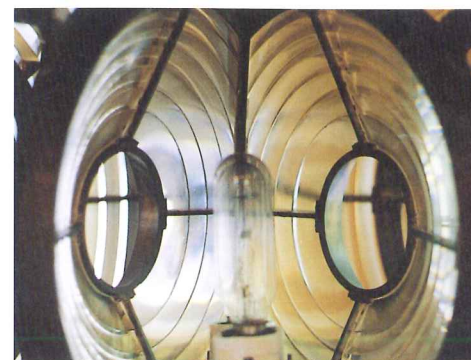
※レンズには焦点距離に基づく等級があり、最大の「第一等」は焦点距離約90センチ。フレネルレンズは、屈折及び反射レンズを組み合わせたレンズで、フランス人オーギュスタン・J・フレネルが発明しました。

#### ●二代目レンズ「LB90型回転灯器」(昭和29年~平成5年)

経費節約・工期短縮及び電化のため開発された灯器。直径90センチ2面、その内側に直径50センチ2面の鋳型による屈折型フレネル式レンズを使用。回転用の電動機を内蔵し、光源にB-3白熱電球を使用するなどにより、高さ約1.6メートルに軽量小型化されました。

#### ●現在のレンズ「LBM60型灯器」(平成5年~)

LB型回転灯器の改良型で、屈折型フレネルレンズの周囲に反射鏡を配置した、直径60センチ2面の筒型灯器です。光源に小型のメタルハライド電球を使用し、軽量化と光学的特性が向上しました。



LB90型回転灯器



LBM60型灯器

●管理の変遷

[光源]

初代の光源である「四重芯石油燈」は円形燈芯綿糸を4列同心円状に配置した火口で石油を燃焼させ白光を発生するものでした。燃焼状態が一定せず光力が変化するため、夜は3名の看守が灯塔の2階にある当直室で輪番で勤務し、日中にはレンズに付いた煤を拭き取る作業が欠かせませんでした。

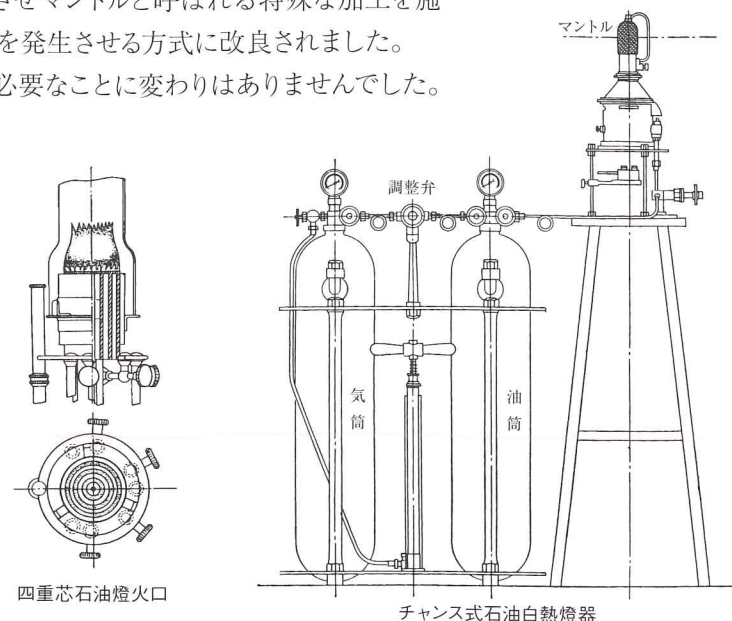
大正3年に「乙式石油蒸発白熱燈」と呼ばれる、石油を加圧加熱してガス化して燃焼させマントルと呼ばれる特殊な加工を施した筒で炎を覆い白熱光を発生させる方式に改良されました。

しかし、夜間に看守が必要なことに変わりはありませんでした。



メタルハライド電球 150W

B-3型電球 1000W



四重芯石油燈火口

チャンス式石油白熱燈器

大正11年に石油灯から電灯（電球1000W）となり、光度が安定するようになりました。光度も6.75万カンデラから63万カンデラに大幅に増大しました。そのためか「電化の当夜は、数十羽の渡り鳥が飛来して、灯台のハリ板に激突し、約二十羽程墜死した。」と記録されています。

レンズを回転させる動力は電化されず、人力による分銅の夜間巻上作業は解消されませんでした。（昭和28年頃、レンズの回転が不安定になったとき、修理が完了するまで職員が交代でレンズを押し回したこともあったそうです。）

昭和29年に灯器が一等レンズから「LB90型回転燈器」となり、電球も小型のB-3型白熱電球（1000W）となりました。これに伴い分銅巻上げ作業もなくなりました。

昭和37年に無線による灯火監視が整備されると、灯台が無人化され、消耗した電球の交換や機械の点検は巡回で行えるようになりました。

平成5年には長寿命で消費電力が少ない現在のメタルハライド電球（150W）となり交換周期も500時間から6000時間に延び、さらに保守管理が省力化されました。

●歴代看守長

組織の変遷により燈台長とも呼ばれていました。

灯台の滞在による管理は、長崎県の女島灯台を最後に平成18年度に解消されました。美保関灯台に看守長等として勤務された方々は次のとおりです。（開設時から滞在勤務解消時まで）

就任年月日	氏名	就任年月日	氏名	就任年月日	氏名
明治31年10月	佐久間 質	大正 8年 7月	柘木 精一	昭和18年 7月	田島 幸助
33年10月	津田 発己	11年 5月	新出 延太郎	21年 4月	清水 善造
36年 4月	堀 初之助	15年 3月	木内 卯作	26年10月	眞野 篤治
36年 8月	武田 甲子太郎	昭和 2年 7月	相羽 蝶五郎	27年11月	大津 静夫
38年 1月	徳増 儀一郎	4年 2月	太田 軍一	28年 8月	福山 光秀※
38年 2月	小澤 芳蔵	4年 6月	大滝 覚治	32年 8月	酒井 茂
39年 4月	櫻木 一枝	9年 5月	鈴木 孝	(昭和37年 4月巡回管理に移行)	
大正 3年 4月	鳥影 喜代松	12年 6月	西村 藤七		

※昭和28年8月境港航路標識事務所発足初代所長  
昭和30年8月境海上保安部灯台課発足初代灯台課長

●灯台の生活  
地元との交流

美保関灯台の官舎は、明治31年から昭和28年（滞在所としては昭和37年）まで使用され、延べ20名の看守長と延べ51名の補員とその家族が共に暮らしました。

灯台から美保関の集落までの距離は約2キロ半で、当時は幅1メートル足らずの上下の激しい道しかありませんでしたが、天然の良港である美保関は、江戸時代より冬季の季節風を避ける船や隠岐島に渡航する船の出入港で栄え、また美保神社の門前町としても賑わい、開業医、小学校、商店等もあり、当時の灯台としては便利地でした。

最大の問題は水不足で、雨水に頼っていたため「入浴等は全く思いも依らぬにて候」と改善の上申がなされています。昭和7年に灯台構内に大型の貯水槽が完備されるまで苦勞が続きました。灯台の生活は概ね自給自足で、開墾された野菜畑の面積は昭和21年には121坪（400平米）あったそうです。

なお、当時も遠足の小学生や多くの観光客が灯台を訪れており、昭和6年の「美保関新聞」に当時の看守長が「灯台に縦覧せられた方は、毎年平均五千人位。その外にスケッチや散策などで縦覧なさらぬ方は、五・六百あります。縦覧時間は、朝は電灯が消えて二時間後から、夕方は電灯の点く一時間前までの間です。事務所の都合で希望を全部満たされぬこともあるので、在所のお方達からも事情をよく注意して頂ければ相互に好都合かと思えます。」と投稿されています。

地元の人々と灯台職員とその家族の間には親しい交流があり、転勤でこの地を去る時は、棧橋に大勢の人が見送りをしてくれたそうです。



その後、美保関灯台は、昭和28年8月から職員交代による滞在管理となり、灯台職員と家族の生活の場は境港市に移りました。灯台官舎に滞在する職員は、船で直接境港から灯台下の大江船着場に行くため、灯台職員と地元との交流は年々疎遠となり、灯台と美保関の集落を結ぶ唯一の道路は荒廃していきました。

昭和37年に巡回管理となり灯台官舎が無人となると、それを惜しむ地元は灯台の活性化の運動をはじめました。美保関灯台を含む地蔵崎地域が大山隠岐国立公園となった昭和38年4月から、美保関漁業青年部が灯台遊覧船「東光丸」を就航させ盛況を得るとともに、美保関町が明治の建造物の保存と将来の観光資源とするため、灯台官舎とその用地の払い下げを申請して昭和39年に国から払い下げを受けました。

マイカーブームが到来し観光が盛んになると、昭和48年に島根県観光開発公社が灯台と美保関の集落を結ぶ有料道路「しおかぜライン」を開通させ、町から公社に現物出資された灯台官舎は「美保関灯台ビュッフェ」として生まれ変わりました。

その後、ビュッフェの管理も美保関町（現在は合併して松江市）に移りましたが、道路が無料化され、駐車場や遊歩道等の環境が年々整えられた結果、毎年多くの観光客で賑わうようになりました。

平成19年には地元住民及び松江市の働きかけにより、美保関灯台は旧灯台官舎とともに登録有形文化財の登録を受けました。

特に美保関灯台は現役の灯台として全国で初めての登録有形文化財です。